# ジャン＝マルク・ルイサダ
# ピアノリサイタル

## 《Au cinéma ce soir》（今宵は映画館にて）

**2023年9月2日（土）18:00開場 18:30開演**

本日のリサイタルは　演奏者からの申し出により
スクリーンの映像とともに　お聴きいただきます。

「今宵は映画館で」は、ルイサダ氏が幼いころ両親と毎週見ていた番組のタイトルでした。氏は、その番組で接した多くの映画を通じて、音楽と映画の« Harmonie parfaite »（完全なる調和）を知り、その体験によってこそ自身の音楽人生が豊かなものになった、と語っています。

ステージ上のスクリーンには、演奏される曲目に合わせてそれらの作品が用いられた映画の数場面が投影されます。このユニークな公演は、本年４月にパリのサル・ガヴォーで行われた演奏会の再演であり、その際に記された演奏会の趣旨は以下の通りです。

*《クラシック音楽の名作の数々は、しばしば映画における感情表現を担う貴重な素材として用いられてきた。ヴィスコンティ、ルイ・マル、ベルイマン、ウッディー・アレン・・これらの巨匠は、彼らの作品のドラマ性、感情の美を、ブラームス、ショパン、マーラー、そしてガーシュインの音楽によって強調する術を知っていた。このリサイタル（今宵は映画館にて）の意図するところは、映画音楽を聞かせることではない。むしろ単に映画館の雰囲気を喚起すること、あるいは我々の慣れ親しんだ音楽作品の数々が、記憶に残る名画の中に結晶となっていることに想いを馳せることである。》*

*（サル・ガヴォー　演奏会案内より）*

# プログラム

斜体は、それぞれの曲が用いられた映画の監督とタイトル

序章

*F.フェリーニ《甘い生活》*

---

W.A.モーツァルト：幻想曲　二短調　K.397
W.A.Mozart：Fantasie d-moll K.397　*J.ヒューストン《許されざる者》*

---

J.ブラームス：３つの間奏曲　Op.117
J.Brahms：3 Intermezzi Op.117　*A. デルヴォー《ブレーでのランデヴー》*

---

J.ブラームス：主題と変奏　ニ短調　Op.18b
J.Brahms：Thema und Variationen d-moll Op.18b　*L.マル《恋人たち》*

---

F.F.ショパン：マズルカ　イ短調　Op.17-4
F.F.Chopin：Mazurka a-moll Op.17-4　*I.ベルイマン《叫びとささやき》*

---

F.F.ショパン：スケルツォ　第２番　変ロ短調　Op.31
F.F.Chopin：Scherzo No.2 b-moll Op.31　*C.ヴィダー　《楽聖ショパン》*

---

休憩

---

R.ワーグナー：エレジー　WWV93
R.Wagner：Elegie WWV93　*L.ヴィスコンティ《ルートヴィヒ》*

---

G.マーラー／A.タロー編曲：交響曲第５番より　アダージェット
G.Mahler/A.Tharaud：Adagietto from Symphony No.5
*L.ヴィスコンティ《ヴェニスに死す》*

---

G.ガーシュウィン：ラプソディー・イン・ブルー
G.Gershwin：Rhapsody in Blue　*W.アレン《マンハッタン》*

---

## プログラム・ノート　解説：寺西基之

**●W.A.モーツァルト：幻想曲 ニ短調 K.397**

モーツァルト（1756－91）は1782年初めにヴァン・スヴィーテン男爵と知り合った。男爵はバッハやヘンデルなど過去の音楽に造詣の深かった音楽愛好家で、モーツァルトはこの男爵との交際を通じてバロック音楽に触れ、自らフーガや幻想曲などバロック的な様式を試みることで音楽にさらに幅と深みを加えていく。このニ短調の幻想曲も男爵と知り合って間もない頃に書かれたと推定されている曲。バロック時代の幻想曲に見られる即興風の音の動きを取り入れつつ、古典派的な明快な曲に仕立て上げている点がモーツァルトらしく、分散和音によるいかにも幻想曲風のアンダンテに始まり、悲哀を帯びたアダージョ、古典派風の軽快なアレグレットと続く。

この曲が用いられた映画は幾つかあるが、ルイサダが挙げているジョン・ヒューストン監督、バート・ランカスターやオードリー・ヘップバーン出演のアメリカの西部劇映画《許されざる者》（1960年）では母親がピアノを弾くシーンでこの曲が使われている。西部劇とモーツァルトという組み合わせが興味深い。

**●J.ブラームス：３つの間奏曲 Op.117**

**J.ブラームス：主題と変奏 ニ短調 Op.18b**

ブラームス（1833－97）の「３つの間奏曲」Op.117は後期の1892年の所産である。この時期のブラームスは晩秋の思いを綴るかのように立て続けにピアノ小品を生み出し、それらはOp.116からOp.119までの４つの曲集として纏められているが、とりわけこのOp.117は当時の彼の孤独な心情を映し出した曲集である。第１曲変ホ長調（アンダンテ・モデラート）はロマン派詩人ヘルダーの訳によるスコットランドの民謡詩（我が子よ、安らかに眠れ／お前が泣くのを見るのはつらい）が掲げられた曲で、深い内面的な叙情を湛えている。第２曲変ロ短調（アンダンテ・ノン・トロッポ・エ・コン・モルタ・エスプレッシオーネ）はソナタ形式風の構成のうちに深い孤独感が滲み出る曲。第３曲嬰ハ短調（アンダンテ・コン・モート）はさらに深い陰鬱な気分に満ちている。アンドレ・デルヴォー監督のフランス・ベルギー映画《ブレーでのランデヴー》（1971年）はマチュー・カリエールが演じる主人公がピアニスト役で、この曲を含む幾つかの音楽作品が映画中に用いられている。

ブラームスはピアノのための変奏曲を幾つか手掛けているが、ニ短調の「主題と変奏」Op.18bは弦楽六重奏曲第１番Op.18の第２楽章として書かれたものを、彼自身がピアノ用に編曲したものである。原曲の六重奏曲は1859年から1860年夏にかけて作曲され、全体に伸びやかな若々しさを湛えた明るい名作だが、第２楽章の「主題と変奏」だけは暗いロマン的な情調が支配的である。それは1859年初めの失恋体験－恋人アガーテとの別れ－が反映されているからとも言われる。ピアノ用への編曲は全曲が完成して間もない1860年夏頃のようで、故シューマンの夫人クララへの誕生日プレゼントとして編曲された。主題は一見バロック風の装いのうちに豊かなロマン的情感を込めたもので、これをもとに６つの変奏が繰り広げられる。この曲は若い人妻の不倫愛を描いたルイ・マル監督、ジャンヌ・モロー主演のフランス映画《恋人たち》（1958年）に用いられたことで広く知られるようになった。

**●F.F.ショパン：マズルカ イ短調 Op.17-4**

**F.F.ショパン：スケルツォ第２番 変ロ短調 Op.31**

ショパン（1810－49）のマズルカは、この曲種本来の民俗舞曲としての特質が詩的な芸術性のうちに昇華され、彼の心のうちを美しく綴ったものとなっている。そのうちのイ短調Op.17-4はレント・マ・ノン・トロッポの憂鬱な気分が支配する曲。途中光が差してくるように長調に転じる部分が印象的だが、すぐ暗い気分に戻り、ふっ切れないまま終る。大邸宅での生と死を巡っての女たちの関係を鮮烈に描いたイングマール・

ベルイマン監督のスウェーデン映画《叫びとささやき》（1973年）ではこの曲が効果的に用いられている。一方、スケルツォ第２番変ロ短調はきわめて劇的な情熱に満ちた作品である。これが書かれたのは1837年だが、当時ショパンはマリア・ヴォジニスカという女性との婚約解消によって心に大きな傷を負っており、この曲の激しさにもそうした苦悩が反映されているのかもしれない。主部は激しい主題と叙情的な副主題をもとに劇的に発展が繰り広げられる。変化に満ちた中間部の後、展開的部分でさらなる発展が行われた後、主部が回帰して、最後は輝かしいコーダで締めくくられる。チャールズ・ヴィダー監督のアメリカ映画《楽聖ショパン》（1945年）はショパンの伝記映画だけに多くのショパンの曲が登場し、このスケルツォ第２番や先述のイ短調のマズルカも用いられている。

**●R.ワーグナー：エレジー WWV93**

音楽と劇を一体化させた総合芸術としての楽劇を創始してオペラ史に革新をもたらしたドイツの巨匠ワーグナー（1813－83）が残したこの小品については、「エレジー」という通称も含め、成立の由来がはっきりしない。晩年の1882年にイタリアのパレルモのポラッツィで書かれたという推測から「ポラッツィの主題」としても知られてきたが、そうした経緯は今日では否定され、作品目録では「変イ長調の主題」という題が使われている。いずれにしても半音階的な響きを盛り込んだその主題は楽劇「トリスタンとイゾルデ」を想起させるものがある。ワーグナーの後援者だったバイエルン国王ルートヴィヒ２世を描いた巨匠ルキノ・ヴィスコンティのイタリア・フランス・西ドイツ合作の映画《ルートヴィヒ》（1972年）において、この主題は冒頭をはじめ随所に効果的に取り入れられている。

**●G.マーラー／A.タロー編曲：交響曲第５番　より　アダージェット**

19世紀末の精神性を如実に示した作曲家マーラー（1860－1911）の交響曲はいずれも大規模で破格のスタイルを持っている。交響曲第５番（1901－02）も苦闘に満ちた第１、２楽章から勝利の第５楽章に至るまでの激しい起伏の変化で運ばれるが、その中にあって第４楽章の甘美なアダージェットは全曲の劇的展開の中のオアシスであるかのようだ。世紀末的な耽美の世界に浸るようなこの美しい楽章はヴィスコンティ監督のイタリア・フランス合作映画《ベニスに死す》（1971年）に用いられて有名になり、それは世界的なマーラー・ブームを引き起こすきっかけとなった。今回は現代フランスを代表するピアニスト、アレクサンドル・タローの編曲によるピアノ版でお聴きいただく。

**●G.ガーシュウィン：ラプソディー・イン・ブルー**

20世紀前期のアメリカの作曲家ガーシュウィン（1898－1937）はジャズや大衆歌などアメリカ固有の音楽の語法を土台としつつ、そこに芸術的な表現を追求していった。彼の代表作が1924年に書かれた「ラプソディー・イン・ブルー」で、ジャズ的な語法に基づきつつ、それをロマン派のラプソディー風の書法やヨーロッパの伝統様式に結び付けた作品となっている。もともとはピアノと小編成のジャズ・バンドのために書かれ、さらに作曲家グローフェのアレンジによるピアノと管弦楽のための協奏曲版も作られたが、他にも今回のようなピアノ独奏用など、幾つかの編曲版がある。曲は低音から高音へと音を滑らせるように上行する印象的なグリッサンド（原曲ではクラリネットが奏する）で始まり、ラグタイムやブルースなどのアメリカ音楽の様々な語法を生かしながら、急緩急の構成のうちに多様な展開が繰り広げられていく。ウディ・アレンが監督し、自身やダイアン・キートンやメリル・ストリープほかが出演しているアメリカ映画《マンハッタン》（1979年）では冒頭の導入部分からこの曲が使われている。

**（てらにし もとゆき・音楽評論家）**